

未来から やってきたアサリ。

革新的な「砂なしアサリ」で、漁業に新しい波を起こしたい。福岡市漁業協同組合（福岡県・志賀島）

■ 地域を、アサリで復活させたい。「昔はたくさんいた漁師も今ではずいぶん減ってしまいました」そう語るのは、福岡市漁協弘支所長の松田さん。ここ福岡県志賀島は、全国有数のワカメ生産地として長い歴史を誇っています。しかし、高齢化の波を避けられず、漁師の平均年齢は60歳を超え、ワカメの漁獲量もピーク時の10分の1近くまで落ち込んでいるそうです。もう一度、地元を活性化し、漁師に安定した収入をつくりたい。そんな想いのもと始まったのが海中に吊るして育てる「砂なしアサリ」の養殖でした。このプロジェクトでは、漁協とアサリの養殖技術の開発を進めるFUバイオカルチャーが連携し、福岡市の支援を受けながら、その成功を目指しています。しかし、そもそもこれまで漁業者や研究者の間では、砂のない場所ではアサリは育たない、というのが定説だったのです。

■ 常識を変えた、画期的なアサリ。これまでの常識をくつがえす画期的なアサリの養殖技術。FUバイオカルチャーの藤芳さんは、つぎのように語ります。「私たちのアサリは最初から砂のない場所で育てるため、砂抜きが必要がなく、食べた時のじゅわっとするあの嫌な口触りもありません」ほかにも、砂なしアサリには数々のメリットが存在します。たとえば、日常の食卓で使われる食材なので、安定的な需要が見込めること。アサリがプランクトンを食べてくれるため、養殖地付近の海がキレイになること。そして、アサリの養殖に欠かせない網の清掃やアサリの加工など、このプロジェクトによって高齢者や女性の方々にもたくさんの働き口を用意できること。まさにいいことづくしの砂なしアサリですが、事業化を目指すにあたっては、じつにたくさんのハードルがあったといいます。

■ この一粒から、日本の漁業を救いたい。そのハードルのひとつが設備の問題です。今回は福岡市のサポートで、市の施設をアサリの稚貝を育てる場所として活用。さらに養殖用の資材や収穫したアサリの加工施設整備には、みらい基金の助成金が使われます。いろいろな人の想いやチカラが集まり、早ければ来年には商品化が実現する砂なしアサリ。漁師からその家族まで。若い人からお年寄りまで。男女問わず地域みんなが参加できるこのプロジェクトは、漁村の未来のひとつの理想形。砂なしアサリの養殖事業で、島の漁業が活気づく日は近そうです。



松田支所長(左) 藤芳代表(右)



一般社団法人
農林水産業みらい基金

未来は、いつだって、現場から生まれる。私たち農林水産業みらい基金は、JA(農業協同組合)・JF(漁業協同組合)・JForest(森林組合)グループの一員である農林中央金庫によって設立されました。

詳しくは <http://www.miraikikin.org/>

